

座談会

アイヌ文化のいま



出席者
 野本正博氏 アイヌ民族博物館学芸員（白老町）
 鹿田川見氏 旭川市博物館学芸員（旭川市）
 貝澤 徹氏 アイヌ工芸製作（平取町）
 貝澤真紀氏 アイヌ工芸製作（平取町）

「アイヌの伝統と文化」シリーズの最終回として、今回は、アイヌ文化のいまを担っている若い人たちに、アイヌ文化に関わるきっかけや伝統文化を伝承していく上での悩み、新たなアイヌ文化創造への今後の展望などを語っていただきました。

アイヌ文化に関わるきっかけ

最初に、皆さんがアイヌ文化に密接に関わるようになったきっかけはどのようなことでしょうか。

貝澤徹 僕の暮らしているニ風谷（北海道平取町）は昔からアイヌ文化が伝承されてきたところで、父親も親類も皆、木彫りや織物とかに携わっておりますので、常に幼少の頃からアイヌ文化に触れていました。しかし、伝統的なものを前向きに彫り始めたのは30代半ばくらいだと思います。それまでは、伝統工芸にどうしても抵抗があり、彫ることができませんでした。でも、あるきっかけによってそれが自分のなかで薄れていき、彫れるようになったというのが正直なところです。そのきっかけは、僕の家にはひいおじいさんから受け継いだお盆があるのですが、ある時、そのお盆を先輩方に見せたところ、その素晴らしさに先輩方のお盆が変りました。その時に、僕の気持ちも変化して、アイヌ文様という平面のものでもインパクトがあるものを彫ってみようという気持ちになり、最初に彫ったものがお盆でした。



貝澤真紀 私もニ風谷で生まれ育ち、実家が民芸品店をやっていたので、アイヌの工芸品をずっと見て育ちました。中学生くらいの時から、つる覚えに彫れるようになり、記念彫り（工芸品に地名、名前などを彫る）を行うようになり

ました。本格的に彫り始めたのは20歳過ぎです。17歳の時、北海道ウタリ協会のコンクールに自分の作った物を出して、奨励賞をいただきました。それが自分の励みにもなって、少しずつ少しずつ彫ってきました。ずっとアイヌ文化に触れて育っていたので、自分のなかではアイヌと日本人との区別がよくわからず、中学生になって、初めて自分がアイヌだと認識しました。

鹿田 私は自分がアイヌだということを全く知らずに育ちました。中学生になる頃だと思いましたが、私はアイヌではないかという気がして、母親に聞いて初めて分かりました。それで、1989年に札幌で第1回アイヌ民族文化祭がありました。それを見てみたいという気持ちになせかなりました。それまでは、観光地でアイヌの踊りを見たことはありますが、アイヌ文化を素晴らしいとは思えなくて、言葉は悪いですが「見せ物」的にしか思えませんでした。しかし、文化祭を見た時、心の底からすごく感動して、私もやってみたい、あんなふうに歌ってみたい、語ってみたいと思うようになりました。その時に初めて聴いた歌にすごく感動して、その歌を覚え、今でも時々歌っていますが、本当にその一つの曲、アイヌの歌が私を変えてくれました。

野本 僕が小学生の頃には、通っていた小学校のすぐ側にアイヌ部落がありました。また、観光客がアイヌ文化を見に来るといふ環境にあつたので、アイヌ文化に対して違和感はありませんでした。けれども、僕にとっては将来にわたつても関わる文化ではないと思いは、高校を卒業後も、札幌へ出てきてアイヌ文化とは関連のない仕事に就きました。ある時、白老



アイヌ工芸品の展示資料のチェック作業（鹿田氏）

のアイヌ民族博物館でチセ（アイヌの伝統的家屋）を復元するという仕事があった。アルバイト感覚で関わったのが、アイヌ文化に積極的に関わるきっかけになりました。それ以後、チセの復元やイオマンテ（熊の霊送り儀式）を通じてアイヌの精神文化に触れることにより、アイヌ民族ってちよつとかっこいいな、と思えるようになってきました。その後、鹿田さんのお話しのなかでも出てきた第1回アイヌ民族文化祭でアイヌの伝統舞踊を初めて舞台上で踊りました。その時、観光地の踊りと舞台の踊りの違いや見る側の姿勢の違いといったものを強く感じて、それから積極的に踊るようになってきました。

文化活動への現在の関わり

現在どのような形でアイヌ文化活動に関わっているのでしょうか。

鹿田 アイヌ語を教えるもらっている時に、大学を出て学芸員の資格を持てば博物館に勤められるということを知り、それがきっかけで大学の通信教育を受ける気になりました。「いつかきつと博物館に行ける、アイヌのことを勉強できる、勉強しながら仕事ができる」という、そのことだけを目標に通信教育で学芸員の資格を取得し、今、旭川市博物館に勤めさせてもらっています。



貝澤真紀 アイヌ語は勉強しているという人たちが覚えていけばいいだろう、自分は工芸が好きだから、アイヌ語を学ばずに工芸で生活

していきたく思っていました。しかし、菅野茂アイヌ語育英資金調査研究員や子供向けのアイヌ語教室の指導助手、アイヌ語ラジオ講座の助手といった仕事を始めると、小さい時に、おばあちゃんや、母、父が使っていたアイヌ語の単語がたくさんあって、アイヌ語を面白いかもしれないと感じるようになりました。今、アイヌ語教室の指導助手をしながら、自分は極められなくてもいいけれど、ちよつとでも覚えている人がいれば、途絶えることもなくつなげていくという思いで、子供たちと一緒に自分もアイヌ語を勉強しています。

野本 アイヌ民族博物館に勤務するようになり、日常業務として、観光客に対してアイヌの歴史や文化について解説をしながら、踊りや儀礼などを伝承したり、儀礼で使う道具類などを作ったりしていました。長くそこに勤めていたのですが、ある時期、すごくストレスがたまってその仕事を2年ばかり離れたことがありました。その時期に、アラスカや台湾、ニュージーランドといったところを積極的に回って、世界の先住民の活動に触れてきました。これらの触れ合いを通じて、博物館は自分たちの文化を一方的に見られるだけではなく、文化を発信することができ、それが先住民にとって非常に戦略的な行為につながるということを認識し、もう一度博物館に戻り、勉強し直して学芸員の資格をとる、今に至っています。

アイヌ文化振興法の指定法人である財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構（以下「アイヌ文化振興財団」）の事業の一つであるアイヌ工芸品展が今年度は徳島県立博物館（終了）、旭川市博物館（10月12日）、11月30日）、国立民族学博物館（1月8日）、2月15日）で開催されます。

この展覧会は、アイヌ自らが企画立案し展示を通して、自分たちの今を見てほしい、今の文化伝承の姿を見てほしいというメッセージがこめられています。日本人がイメージしているステレオタイプのアイヌではなく、「現在の生活のなかでも、アイヌとしての民族的アイデンティティを持って、先祖の文化を学んで伝えようとしているんだよ」というメッセージです。今までは、博物館側が企画して、そこにアイヌの人たちに少し関わってもらおうというスタイルでしたが、ようやく日本のアイヌの展示も変わってきたようです。

博物館では、展示解説や質問対応を行っています。質問もさまざまなものがあって、昔みたいに伝統的な文化だけではなく、現代のアイヌの人々の生活について教えてくださいというものもあり、最近このような要望が非常に増えています。

貝澤真紀 昔のことだけを教えるのではなく、現状はこうだということも教えるなければいけないと思います。

野本 有名な伝承者の方々も、いつもユカラ（英雄叙事詩）を語ったり、アットゥシ（樹皮衣）をつくったり、キナ（コザ）を編んだりしているわけではありません。それはその文化の一部であって、彼等の生活の基本となるのは、普通の生活であり、ただ生活のなかでもそういう文化的な一面もあるということです。

文化活動の悩みや課題

文化活動を行っていく際に、いろいろな悩みや課題も出てくると思いますが、どうでしょうか。



アメリカ・スミソニアン博物館にて制作したチセとともに(野本氏)

貝澤真紀 アイヌ文様がすごく好きで、いつも地面に描いて遊んでいました。ある時、私のおじさんに「昔はこんな文様はなかったのに時代が変われば変わるものだな」と



と言われました。それから、ちぶりあつた自信がなくなってきた。私の描いている文様は間違いなのかなと思いい友人に相談しました。すると、その友人は、今生きている私たちがアイヌ文化を伝承して受け継ぎ、創造していかないとそこで止まってしまうって発展しないのだから、真紀ちゃんには真紀ちゃんの文様を描けばいいんだよ」とアドバイスしてくれました。これで自信を取り戻して、それからずっと今も、自分が描いている文様は自分のアイヌ文様だという自信を持ち続けています。

野本 以前、アイヌ研究者から、この文様や儀礼の所作は伝統的ではないと言われたことがありました。では、伝統的なものはいつできたのかということをしごく疑問に思っ、自分で考えてみました。自分のなかでは、実は伝統的なものというのは、その伝統を担うべき人間がその都度考えるべきことではないかという結論にたどりつき、今は、いろいろなことにチャレンジをしています。

貝澤真紀 私たちが今作っている物は、お客さんの目から見ても伝統から離れて新しい物に変わっていくように見えるかもしれません。昔からある木のお盆など伝統的な物だけを売っていたのでは生活できない。そうなるって新しい物、今の

お客さんが喜ぶような物、例えば携帯ストラップを作ってみたらどうかなど、いろいろチャレンジしていますが、そうすると伝統からかけ離れているのではないかとと言われることもあります。しかし、私は、作る物の形が変わってもアイヌの精神文化を忘れずにきちんと自分の胸に留めておいたならば、私たちが今作っている物も、100年後には昔の伝統的なものとしてきちんと残されていくのではないかと。だから、私はその伝統にこだわらず、伝統を自分の中にきちんと受け止めておいて、それを元手に新しい物をどんどん作っていくことと思っており、誰かに何か言われても、私が作る物も将来は伝統的なものになるからと、胸を張って言えるようになりたいと思っています。

貝澤徹 父親は彫り物、母親はアットウシ織りに携わっている環境で育ってきたので、今まで幼少から関わってきたものが伝統と理解していますが、伝統というのは、どこまでが伝統で、どう受け継いでいけばいいのかと考えるながら現在に至っています。

昔ながらのお盆を現在も彫つていければいいのかという点、それは違つと思えます。これまでの人たちもその時代に合わせた物を作ってきており、例えば、最初はアイヌの民具に施していた文様を時代に合わせて、お盆に彫つたり茶托に彫つたりしてきました。僕たちが彫るものもこれから変化して、新たな物に施されてもそれは伝統です。ただ、彫るからには、先輩方が今まで努力して蓄積してきたものなので、なるべく崩さないような恥じないようなものを彫っていきたいです。

鹿田 私は、アイヌ語を全く知らないで育って、学び始めたのが28歳からです。この3、4年、家

庭の事情でアイヌ語の勉強には関わっていませんが子供が生まれる以前はアイヌ語の勉強をしていました。そこで、ある有名な研究家の方に「あなたのアイヌ語は本物ではない」と言われ、すごく悩んだことがあります。私は、アイヌ語をテープだけを聴いて勉強しました。テープをまねていただけなので、実際の生の声を知っている人には耳障りなのだろうかなどと悩んだ時期があつて、人前では話したり歌ったりすることが全くできなくなりました。仲間の助言もあり、本物ではないといわれながらも話さなければいけない、今そういう状況にあるのではないかと思うようになって、アイヌ語を話せるようになりました。

アイヌ文化の今後の展開

これから、アイヌ文化をさらに発展させていくために、どのようなことをお考えですか。鹿田 自分の子供には機会があるたびにアイヌ文化に触れさせたいとは思っています。それは、アイヌとして生きてほしいという思いからではなく、子供にアイヌとして生きるかどうかを選択する自由を与えたいと考えているからです。子供にはいろいろな場面で、自分はどうしたいかというところを考えてほしいです。

野本 多くの研究者が、アイヌの世界観や自然観、あるいはアイヌがおかれている状況を一般の人たちに紹介しています。先日発表されたアイヌの若者に対するアンケートでは、約6割がアイヌ文化を失いたくないと答えまし





大阪・現代画廊での「貝澤真紀アイヌ工芸品展」にて(貝澤真紀氏)



現代の感性で木彫に挑む(貝澤氏)

た。しかし、そういう若者たちの意識にアイヌ自身の対応があまりにも少ないように思います。また、アイヌの自然観や世界観、あるいはアイヌがおかれている状況などをもうと積極的に紹介していくべきではないでしょうか。

それから、アイヌ文化も産業ときちんと結びつかないと、今日的な文化の伝承はスムーズに流れて行かないだろうと思います。アイヌ文化振興財団の補助金があるところは文化の継承はできるかもしれませんが、それが途切れた場合にどうなるのでしょうか。やはり、今の段階で、例えばアイヌのデザインは素晴らしいので、それを商品化して産業につなげるといった活動をもっと組織的に行うことが必要なのではないかと思えます。

貝澤徹 僕もそう思います。継承するにはやはり産業としてある程度自立できることが必要であり、日本の伝統工芸品として認められるような方向に持っていく必要があるのではないのでしょうか。

僕は、30代過ぎから、伝統的な物を彫り始めたので、今、10年ちよつとになりますが、それまで一切取り組まなかつたために周りに比べると遅れていると思います。このため、少しでも多く彫りたくて、彫り続けているのですが、そのなかで、やはり発展性のある物をつくりたいと考えています。

貝澤真紀 私の実家が店を持っていて、自分の作った物を店で売って、仕事として受け継いでいけるけれど、木彫りや刺しゅうをしたいという若い人たちがいても、環境が整っていないために趣味程

度にしかなできません。私は、望む人たちがきちんと働いて、その給料で彫刻もできる、刺しゅうもできる、生活もできるという、そういう環境をつくるのが、今、私たちが最初にやらなければならないことではないかと思えます。

鹿田 博物館の仕事に携わり感じることは、アイヌ文化に関心を持つ人が少ないということです。博物館でいろいろとアイヌ文化に関する講座を開きますが、なかなか人が集まらない。その他に、いろいろな人と接するを通じて、アイヌに対する偏見が多いということも感じます。子供たちでさえも偏見を持っています。そういう偏見が受け継がれている一方で、当然知っているべきことが知られていない。分かつてほしいと思うのは、決してアイヌは特別ではないということです。ですから、博物館の仕事を通して、そういう偏見や誤解をなくしたいと考えています。

野本 僕は、ビジネスにつながるような先住民の研究をしています。先住民の文化資源や環境資源を活用した先住民活動、例えば、自然ガイドや博物館の展示への先住民の関与のあり方をオーストラリアやカナダの事例を踏まえ研究したいと考えています。

もつとアイヌ文化を知るために

アイヌ文化をもつと知りたと思う人々へのアドバイスがあれば、教えてください。

貝澤真紀 今、アイヌに関する本がたくさんありましたが、その本を読んで頭に知識だけを詰め込んだり、インタビュウの対象として接したりするのはではなく、やはり現地に行つて、本当に仲良くなつて、触れあつることが大切だと思います。

貝澤徹 そうですね。私たちは、現在も民族衣

装を着て生活しているわけではありませんが、このよつなことは地元に来て触れてもらうと一番理解が得られると思います。特に若い人には。

貝澤真紀 そのついでに偏見を持たずに来て、いろいろ触れあつてほしいと思いますが、調査や研究を目的として来てほしいありません。人間が人間の研究をするというのは一番おかしいことだと思います。そういう研究の材料としてアイヌと触れあつては、人間として、お友達としてお付き合いする、そういう考えでいらつしやる方は大歓迎でお待ちしています。

貝澤徹 以前、大学生が課題として先生から異文化の研究が与えられ、友達は海外へ行つたが、自分は金がないから北海道に来ました(笑)ということがありました。金がないから北海道のアイヌを見に来たというのは、ちよつと考え方が違うのではないかと思つたことがあります。

鹿田 アイヌのことをよく理解してもらいたいですが、最近、アイヌ文化を十分に理解せずに利用することだけが目について、妙にさめてしまつています。例えば、ちよつとした響きのいいアイヌ語があると、それを商品名にしよつとします。使つとすると、それを商品名にしよつとします。使つとすると、それを商品名にしよつとします。使つとすると、それを商品名にしよつとします。

野本 逆に言つと、そのついでに自分たちでいちはやく活用して、広げた方がいではないでしょうか。いづれにしても、アイヌ神謡集の序文にもあるよつに、「その昔、この広い北海道は、私たちの先祖の自由の天地でありました」とも事実であり、そして、現在は、伝統文化を育むなかで、新しい文化を創造するわれわれがいるというこも知つていただき、お互いを理解しあい、尊重しあつてお付き合いがしたいと思つています。